和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について（2）

―銅鏡及び耳環、玉、陶質土器―

石丸　彩・岩本　崇・金澤　舞・瀬谷今日子・
中西瑠花・仲原知之・馬場彩加

はじめに

和歌山大学には様々な経緯で集められた岩橋千塚古墳群出土と伝えられる資料が存在する。本稿では、これらの資料を紹介する[1)]とともに、それらの資料が出土した経緯や資料の位置づけについて検討を行うものとする。なお資料は、埴輪、須恵器、陶質土器、鏡、耳環、玉、鉄製品等、多数に及ぶ。そのため、報告は３部に分け、本稿は２部にあたる。第１部の須恵器と埴輪については、前号[2)]で報告を行った。本稿では銅鏡及び耳環、玉、陶質土器について報告を行う。

1. 銅鏡（虺龍文鏡）

岩橋千塚古墳群から出土したと伝えられる鏡が１面ある。細線表現による逆Ｓ字形の虺龍文を四乳の間に主文様として配置する虺龍文鏡である（図１）。

特　徴　直径8.8cm、重さ165g、厚さは内区で2mm程度である。鏡背面全体が薄い膜状の銹に覆われており、鏡面には布が付着する。

中心に円座にのった鈕がある。鈕孔は幅約4mm、高さ約4mmであり、隅が丸みを帯びた台形状を呈する（図２）。鈕頂部の直径4mmほどの範囲が研磨によって平らに加工される。

鈕の外周をめぐる鈕座は、断面三角形の界線で外側の内区と画され、直行方向の２本線と斜行する１本線を交互に配する輻射文をやや不鮮明ながら円座の周囲にあらわす。

鈕座の外側に位置する内区の文様構成は、主文様を置く主文部の内外に１

条ずつ斜行櫛歯文帯をめぐらすのを虺龍文鏡では通例とするが、本例では内側の文様帯が不鮮明になっており、文様そのものを確認できない。外側の文様帯にはかすかに斜行櫛歯文を観察できるが、全体にきわめて不鮮明である。内区主文様となる虺龍文は、逆S字形の湾曲がややゆるやかであり、先端の頭部表現が簡略化したものとなっている。逆S字の屈曲部付近には小鳥とおぼしき図文が配されるようであるが、細かな文様表現は笵傷によるつぶれや不鮮明な表出のため不明である。内区主文部を区画する四乳は、円座にのった半球乳である。

図1　虺龍文鏡 写真・断面図

図2　虺龍文鏡の鈕孔

内区と段差を介した外区は素文であり、厚さは最大で6mmほどに達する。同じ部位でも場所によって1mmほどの厚みの差が生じており、鋳型成形の精度が低かった可能性が想定される。鏡背面は全体に文様が不鮮明であり、文様を構成する突線が近接した箇所において笵傷によるつぶれが発生する傾向が顕著である(図３)。

なお、付着物のため、仕上げの研磨や摩滅の状態などは確認できない。

位置づけ　文様構成・表現からは岡村秀典による分類のⅡB式にあたり、漢鏡４期でも後半(１世紀前葉)に比定される(岡村 1984)。ただし、本例については、文様を構成する突線の近接した部分で笵傷が多いこと、形状に丸みを帯びた箇所が顕著であること、細かな表現を中心として全体的に文様が不鮮明であることから、金属原型をもちいた踏返しの可能性を考慮できる。鈕孔の開口方向が、写真の向きで水平･垂直方向を指向する漢鏡とは異なり、45

度傾いて乳を結ぶ方向にとる点も、踏返し鏡であることを示唆する。上述した鋳型成形の精度の低さも、踏返しに起因する可能性があろう。

古墳出土の虺龍文鏡のなかでも踏返し鏡と想定される資料には、和歌山県椒古墳例（図4-1）や兵庫県宮山古墳例（図4-2）があり、中期後半の副葬例であることも考慮されて、いわゆる同型鏡群との関係が指摘されてきた。具体的には、椒古墳例については鈕孔の大きい点を根拠に、同型鏡群との関連が想定されている（辻田 2018）。しかし、同じ鈕孔の特徴は、前期前半の島根県小屋谷３号墳例（図4-3・5-2）や、中期中葉の千葉県姉崎二子塚古墳例（図4-4・5-3）でもみとめられる。これらは漢鏡に特徴的な回転力を用いたことに起因する同心円状の研磨条痕を鈕座上面や乳座上面にとどめており、踏返し鏡ではないと考える。とくに、姉崎二子塚古墳例は各部に丸みを帯びつつも、内区主文部の内外にめぐる櫛歯文帯をはじめ文様細部は鮮明である（図4-4）。つまり、各部形状の丸みは、踏返しに由来するものではなく、鋳造後に生じた属性と判断できる。同様に、椒古墳例については明らかな文様不鮮明部分や細部に生じた笵傷を確認することはできず、これを踏返し鏡とする根拠は乏しいようにも思われる。一方、宮山古墳例は通例の虺龍文鏡にある鈕座がみとめられず、鈕が直径に比して大きく低平であることから、踏返しによって原型となる鏡の鈕座に相当する範囲にまで、鈕を拡大した例と判断しうる（図5-1）。著しく鏡体が厚い点も踏返し鏡であることを示唆すると考える。ただし、宮山古墳例を鈕孔形態から同型鏡群に含める見解もあるものの（辻田 2018）、比較的整った長方形を呈する鈕孔は、楕円形や円形が目立つ同型鏡群とは差があると評価することもできよう。このように中期古墳出土の虺龍文鏡には、同型鏡群との関係が想定されるものの、それ

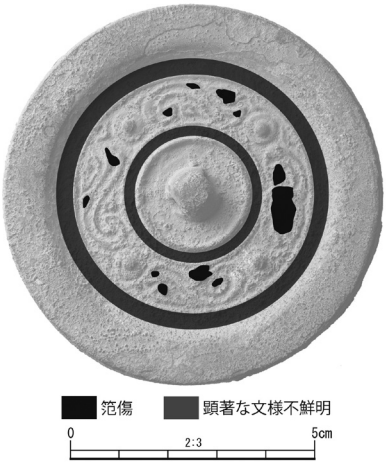


図3　虺龍文鏡にみる笵傷・文様不鮮明部分の分布

1. 和歌山県椒古墳（径 11.8cm）

2. 兵庫県宮山古墳（径 10.2cm）

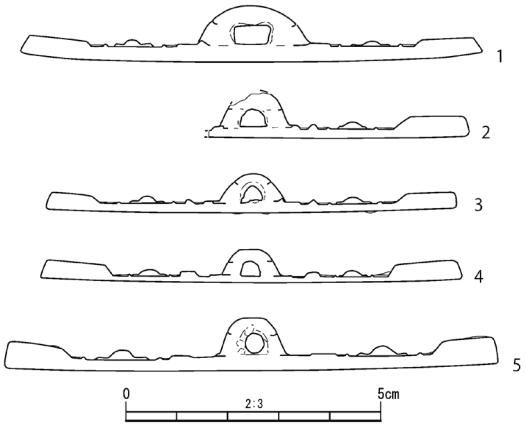
3. 島根県小屋谷３号墳（径 9.5cm）

4. 千葉県姉崎二子塚古墳（径 9.1cm）

5. 伝・愛知県兜山古墳（径 9.2cm）

6. 伝・鳥取県東郷町宮内（径 10.9cm）

図4　虺龍文鏡の関連資料



1. 兵庫県宮山古墳〔踏返し鏡〕　2. 島根県小屋谷 3 号墳〔漢鏡〕
3. 千葉県姉崎二子塚古墳〔漢鏡〕　4. 伝・愛知県兜山古墳〔踏返し鏡〕
5. 伝・鳥取県東郷町宮内〔踏返し鏡〕

図5　虺龍文鏡の断面図

を積極的にみとめるにはなお検討が必要な段階にあると考える。

そのうえで、伝岩橋千塚古墳群例にかんして注目すべきは、鈕頂部が研磨によって平らに加工される点である。この特徴はいわゆる同型鏡群にはみとめられず、確実な古墳出土鏡にもおおよそ例がない。むしろ、古くから認識されてきたように、北宋以降の一定期間に踏返しによって復古的に製作された、いわゆる仿漢鏡に顕著な特徴である点には注意が必要である（梁 1940-42）。同様の特徴をもつ虺龍文鏡に、愛知県兜山古墳出土と伝えられる例（図4-5・5-4）や鳥取県東郷町宮内出土と伝えられる例（図4-6・5-5）がある。これらに特徴的にみとめられる文様の全体的な不鮮明さや笵傷による細部の文様のつぶれは、伝岩橋千塚古墳群例と共通するところが多い。

上記の諸点をふまえると、伝岩橋千塚古墳群例については、踏返し鏡の特徴をもつ点において古墳副葬鏡である同型鏡群と関連する余地をわずかに残しつつも、古墳出土品ではない可能性をも含めた慎重なとりあつかいを要する。

なお、本例の時期的な評価をより確実におこなうには、材質調査を目的とした理化学的な分析が有効である。これまでにも指摘されているように、含錫量が減少し、含鉛量が増加しつつ、亜鉛の比率が高い成分であれば、北宋以降の踏返し鏡となる可能性が高いと考えられる（梅原 1937、孔・劉 1984）。将来的には理化学的な分析がなされることを期待したい。

2. 耳環

岩橋千塚古墳群出土とみられる耳環は３点あり、うち金環が２点、銀環とみられるものが１点である。なお、法量の計測位置は図６に示した。また、遺物の素材は肉眼観察によるものである。

金環（図7-1）　長さ2.7cm、幅3.15cm、断面縦厚（以下、「縦厚」という。）0.65cm、横厚（以下、「横厚」という。）0.8cm、重さ19.13gの完形の金環である。全体は銅銹に覆われているが、一部に金の薄板が残存することから、銅芯に表面材として金を張った銅芯金張と判断される。断面は楕円形を呈し、重量から中実と考えられる。出土地は、「海草郡西和佐村出土」と書かれた同封ラベル及び「405・1」のタグシールから、海草郡西和佐村岩橋古墳出土[3)]とみられる。

銀環（図7-2）　長さ2.55cm、幅2.8cm、縦厚0.5cm、横厚0.45cm、重さ8.94gの完形の銀環である[4)]。図7-1と同様に全体は銅銹に覆われているが、一部に白色状の薄板が残存することから、銅芯に表面材として銀を張った銅芯銀張と推測される。断面は円形を呈し、重量から中実とみられる。図7-1と同様の箱に保管されていたことから、出土地は図7-1と同一と考えられる。

金環（図7-3）　長さ2.1cm、幅2.25cm、縦厚0.2cm、横厚0.2cmの完形の金環である。図7-1・2に比べ小型で細い。全体は銅銹に覆われているが、一部に金の薄板が残存することから、銅芯金張と考えられる。断面は円形を呈し、重量から中実と判断される。出土地は、付されたタグシール「405・3」から海草郡岡崎村出土とみられる。

位置づけ　和歌山大学が所蔵する上記耳環３点は、いずれも出土した古墳やその状況が明らかでなく、共伴する遺物も不明確であるため、位置づけることが難しい。ここでは、岩橋千塚古墳群から出土した耳環の法量、材質、製作技法の比較検討から、和歌山大学所蔵耳環の年代的・階層的位置づけについて検討してみたい。

岩橋千塚古墳群では、今回報告した耳環も含めると合計66点の耳環の出土が知られ（表１･図8～10･写真２）、このうち出土した古墳及び時期が判明するものは28点で（図8-1～14･図9-17～30）、数量は金環21点、銀環７点である[5)]。これらを用いて、まず岩橋千塚古墳群における耳環の時期的な変遷をみてい

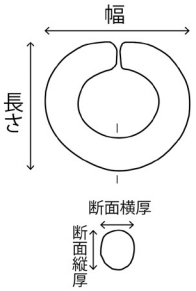


図6　耳環計測位置模式図

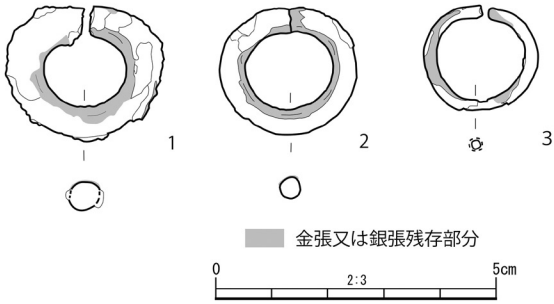


図7　和歌山大学所蔵
伝岩橋千塚古墳群出土耳環（S=２／３）

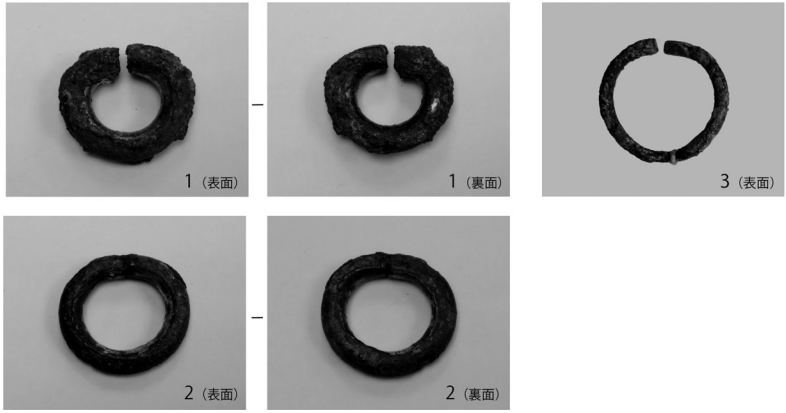


写真1　和歌山大学所蔵　伝岩橋千塚古墳群出土耳環写真（縮尺不同）

きたい。

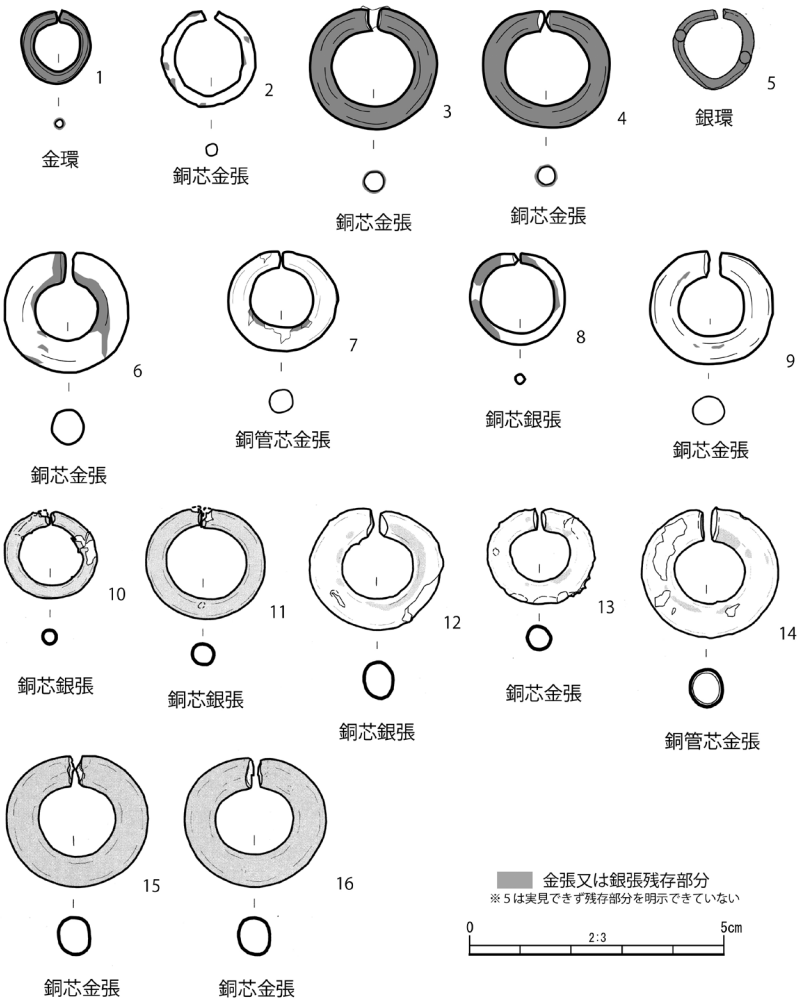
岩橋千塚古墳群から出土した耳環は、6世紀前半であるMT15～TK10型式期から6世紀末から7世紀初頭のTK209型式期までみられ、6世紀後半のものが多い。種類は金環と銀環で、材質は銅芯金張又は銀張が多く認められる。法量は、金環と銀環で異なる傾向が認められ、金環は幅2.4cm未満で断面径（縦厚と横厚の平均）0.3cm未満の小型で細いタイプ（以下、「小型品」という。）、幅2.4cm以上3cm未満で断面径0.2cm以上0.5cm未満の中型タイプ（以下、「中型品」という。）、径2.4cm以上で断面径0.45cm以上の大型で太いタ

表1　岩橋千塚古墳群出土耳環一覧

図番	遺跡/出土地名	墳形	規模(m)	埋葬施設	種別	時期	法量(重量はg、その他はcm) 長	幅	縦厚	横厚	重量	中実/中空	備考	参考文献
図7-1	伝岩橋千塚古墳群	不明	不明	不明	銅芯金張	—	2.7	3.15	0.65	0.8	19.13	中実	和大所蔵 西和佐村岩橋古墳出土	
図7-2	伝岩橋千塚古墳群	不明	不明	不明	銅芯銀張か	—	2.55	2.8	0.5	0.45	8.94	中実	和大所蔵 西和佐村岩橋古墳出土	
図7-3	伝岩橋千塚古墳群	不明	不明	不明	銅芯金張	—	2.1	2.25	0.2	0.2	—	中実	和大所蔵 岡崎村出土	
図8-1	井辺前山6号墳	前方後円	49	横穴式石室	金環	MT15～TK10	1.55	1.5	0.28	0.26	3.51	中実		和歌山県教委1967
図8-2					銅芯金張	MT15～TK10	2.1	2.06	0.24	0.23	1.76	中実		
図8-3					銅芯金張	MT15～TK10	2.62	2.82	0.49	0.5	10.92	中実		
図8-4					銅芯金張	MT15～TK10	2.55	2.82	0.5	0.49	11.18	中実		
図8-5	前山B53号墳(将軍塚古墳)	前方後円	42.5	横穴式石室	銀環	MT85	1.78	1.71	0.25	0.25	0.8	中実		末永編1967
図8-6	前山B220号墳(K-4号墳)2号横穴式石室	円	17	横穴式石室	銅芯金張	6世紀後半	2.5	2.65	0.7	0.8	21.59	中実		風土記1976
図8-7					銅管芯金張	6世紀後半	2.27	2.43	0.54	0.51	9.15	中空		風土記1976
図8-8					銅芯銀張	6世紀後半	2	2.1	0.2	0.2	18.47	中実		風土記1976
図8-9					銅芯金張	6世紀後半	2.53	2.72	0.81	0.63	18.47	中実		風土記1976
図8-10	前山B36号墳	不明	不明	横穴式石室	銅芯銀張	6世紀後半	1.95	2.05	0.13	0.1	1.71	中実		仲原2014
図8-11					銅芯銀張	6世紀後半	2.45	2.6	0.25	0.25	5.95	中実		仲原2014
図8-12					銅芯銀張	6世紀後半	2.7	3	0.58	0.54	19.15	中実		仲原2014
図8-13					銅芯金張	6世紀後半	2.1	2.4	0.35	0.31	5.98	中実		仲原2014
図8-14					銅管芯金張	6世紀後半	2.9	3.05	0.66	0.53	6.13	中空		仲原2014
図8-15	伝岩橋千塚古墳群	不明	不明	不明	銅芯金張	6世紀後半か	2.69	2.92	0.65	0.55	29.94	中実	前山B36号墳か	仲原2014
図8-16		不明	不明	不明	銅芯金張	6世紀後半か	2.65	2.94	0.65	0.53	30.02	中実	前山B36号墳か	仲原2014
図9-17	前山B101号墳(K-3号墳)	円	12	横穴式石室	銀環	TK43	1.55	1.75	0.15	0.2	1.16	中実		風土記1976
図9-18					銀環	TK43	1.75	1.75	0.2	0.2	1.6	中実		風土記1976
図9-19	山東22号墳	円	26～28	横穴式石室	銅芯金張	TK43	2.4	2.6	0.6	0.8	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-20					銅芯金張	TK43	2.4	2.8	0.5	0.5	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-21					銅芯金張	TK43	2.3	2.5	0.4	0.4	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-22					銅芯金張	TK43	2.6	3	0.6	0.6	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-23					銅芯金張	TK43	2.8	3.1	0.7	0.8	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-24					銅芯金張	TK43	2.6	3	0.6	0.7	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-25					銅芯金張	TK43	2.7	3	0.6	0.6	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-26					銅芯金張	TK43	2.8	3	0.6	0.7	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-27					銅芯金張	TK43	2.6	2.9	0.6	0.6	—	中実	実測図から計測	県センター1992
図9-28	前山A87号墳	円	10	横穴式石室	金環	6世紀後葉～	1.8	1.8	0.5	0.4	2.65	中空		和歌山県教委2019
図9-29	井辺1号墳	方	北辺17、南辺36×29	横穴式石室	金環	TK209	2.9	2.7	0.6	0.6	—	中実	実測図から計測	末永編1967
図9-30	大谷山38号墳	円	10	横穴式石室	金環	6世紀末から7世紀初頭	2.9	2.8	—	0.6	—	中実	実測図から計測	和歌山県教委2004
図9-31	前山B223号墳(花木園東部地区KE2号墳)	不明	不明	横穴式石室	銅芯銀張か	6世紀	2.62	2.92	0.56	0.53	10.66	中実		風土記1976
図9-32	前山A地区				銅芯金張	—	1.7	1.95	0.45	0.6	7.26	中実	風土記の丘蔵	
図10-33	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張		2.73	3.1	0.7	0.88	—	中実	A地区表採。個人蔵	
図10-34	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張		3.01	2.58	0.57	0.71	15.03	中実	風土記の丘蔵	
図10-35	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張		3.02	3.4	0.84	0.8	20.19	中実	風土記の丘蔵	
図10-36	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張		2.75	3.08	0.9	0.73	29.57	中実	風土記の丘蔵	
写真2-37	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張		3	3.1	0.8	0.7	—	中実		和歌山県1921
写真2-38	伝岩橋千塚古墳群				銅芯金張か		2.4	2.2	0.6	0.4	—	中実		和歌山県1921
写真2-39	伝岩橋千塚古墳群				銅芯銀張		2.6	3.1	0.7	0.5	—	中実		和歌山県1921
写真2-40	伝岩橋千塚古墳群				銅芯銀張		2.6	2.7	0.6	0.7	—	中実		和歌山県1921
写真2-41	伝岩橋千塚古墳群				銀環		1.8	1.9	0.1	0.1	—	中実		和歌山県1921
写真2-42	伝岩橋千塚古墳群				銀環		2.1	2.1	0.1	0.1	—	中実		和歌山県1921
写真2-43	伝岩橋千塚古墳群				銀環		1.8	1.8	0.15	0.1	—	中実		和歌山県1921
写真2-44	伝岩橋千塚古墳群				銀環		1.7	1.7	0.15	0.1	—	中実		和歌山県1921
—	伝岩橋千塚古墳群				金環		—	—	—	—	—	不明	金環5点　所在不明	和歌山県1921
—	伝岩橋千塚古墳群				銀環		—	—	—	—	—	不明	銀環9点　所在不明	和歌山県1921
—	伝岩橋千塚古墳群花山地区				金環		—	—	—	—	—	不明	金環5点　所在不明	末永編1967

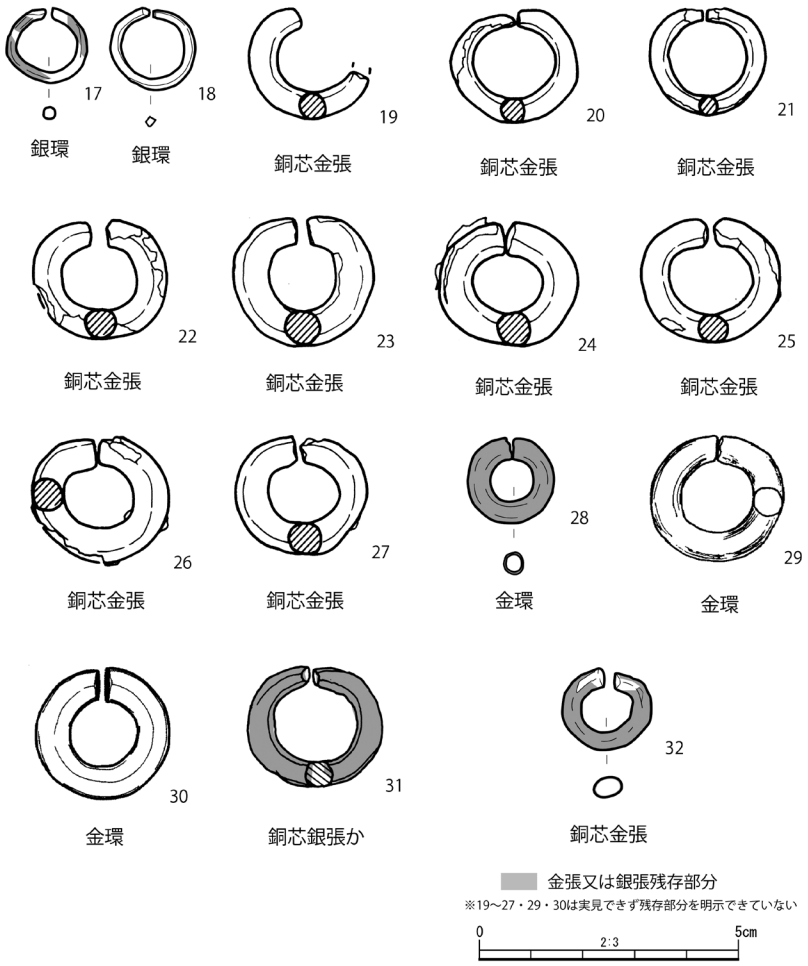
( ):残存法量

—:所在不明や紐などで留められて保管されており、計測できなかなかったもの。



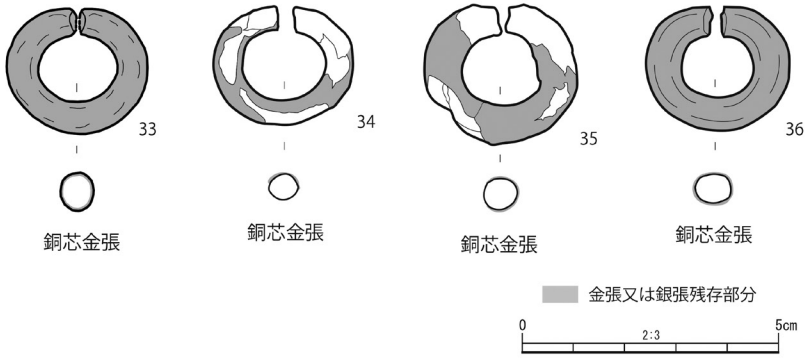
1～4. 井辺前山6号墳　5. 前山B53号墳（将軍塚古墳）　6～9. 前山B220号墳（K-4号墳）2号横穴式石室　10～14. 前山B36号墳　15・16. 伝岩橋千塚古墳群（前山B36号墳か）

図8　岩橋千塚古墳群出土耳環①（S=2/3）



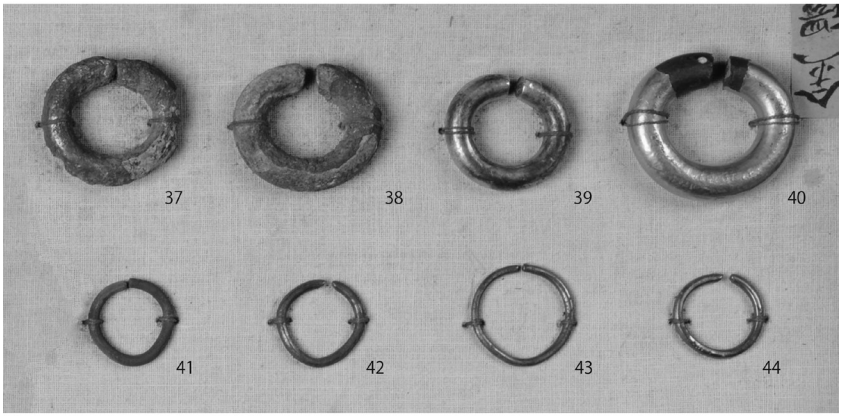
17・18. 前山 B101 号墳（K-3 号墳）　19 ～ 27. 山東 22 号墳　28. 前山 A87 号墳　29. 井辺 1 号墳　30. 大谷山 38 号墳　31. 前山 B223 号墳（花木園東部地区 KE2 号墳）　32. 前山 A 地区

図9　岩橋千塚古墳群出土耳環②（S=2/3）



33 ～ 36. 伝岩橋千塚古墳群

図10　岩橋千塚古墳群出土耳環③（S=2/3）



37 ～ 44. 伝岩橋千塚古墳群

写真2　伝岩橋千塚古墳群出土耳環写真（縮尺不同）

イプ（以下、「大型品」という。）に大きく分かれる。時期別にみると、6 世紀前半に小型品と大型品がみられるが、小型品は当該期にのみ確認でき、6 世紀後半には中型品から大型品、このうち大型品が主体となるようである。大型品のうち、特に幅2.7cm 以上、断面径0.55cm 以上のものは 6 世紀後半にしか確認することができない。また、金環は中実のものが主体を占めるものの、中空のものが 3 点確認されている。中空の耳環は、古墳の帰属時期からみて

６世紀後半から出現するとみられる。全国的に耳環の時期的な変遷を整理した横田慎吾氏によると、錫や鉛製、断面多角形や芯が捩じれた耳環などの特殊な例や北部九州に多い細型の金無垢耳環を除けば、地域・材質・製作技法を問わず、耳環は６世紀後半にむかって小型品から大型品へと変化し、６世紀末に再び小型化すること、また６世紀後半に中空の耳環が出現することが指摘されている（横田 2017）。岩橋千塚古墳群出土の金環については、全国的なこうした動きと連動するものであったと考えられる。

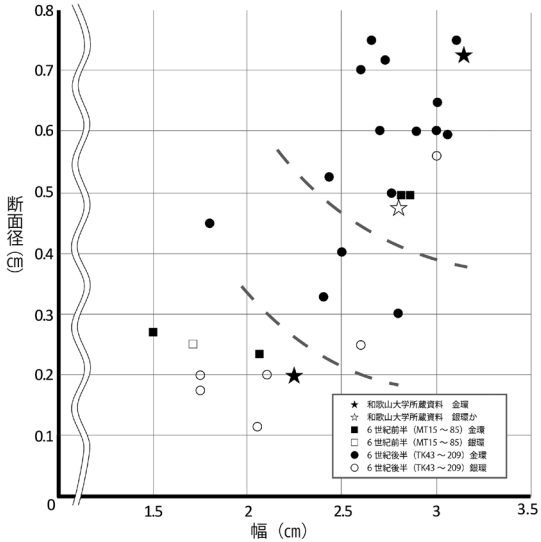


図11　岩橋千塚古墳群出土耳環法量分布図

一方、銀環は出土数が少なく、６世紀を前半と後半に分けて検討することは難しい。６世紀における銀環の法量は、中・大型品もみられるが２点のみで、その他はおよそ幅2.5cm未満で断面径0.3cm未満の小型で細いタイプである。検討数量が少ないため確定的なことは言えないが、こうした傾向は横田氏の指摘とは異なり、当該古墳群において特徴的なものである可能性をあげておきたい。

次に耳環を出土する古墳の階層性についても検討しておきたい。耳環が出土する古墳は、墳形が前方後円墳や大型の円墳・方墳、中小型の円墳であり、埋葬施設は横穴式石室である。岩橋千塚古墳群では６世紀代の古墳の埋葬施設として、横穴式石室のほか竪穴式石室や箱式石棺も造られる。竪穴式石室や箱式石棺は、横穴式石室に比べ出土する副葬品が簡素であることから、相対的に階層が低いと評価されているが、そうした古墳からは耳環が出土しな

いことがすでに指摘されている（瀬谷 2016）。したがって、岩橋千塚古墳群において、耳環は首長層を含めた上位から中位階層の人々に副葬されるものであったと考えられる。

以上のように、岩橋千塚古墳群における耳環の時期的な変遷の特徴と階層性について確認してきた。これらを踏まえた上で、和歌山大学が所蔵している伝岩橋千塚古墳群出土の耳環について、その位置づけを検討していこう。和歌山大学所蔵伝岩橋千塚古墳群出土の耳環は３点あり、そのうち図7-1の金環は法量や材質、製作技法からみて６世紀後半、図7-3の金環は６世紀前半のものである可能性が高いと考えられる。一方、銀環については大型品であり、こうした銀環は岩橋千塚古墳群出土品では６世紀後半に帰属する前山B36号墳から１点出土しているのみであることから、時期を限定する根拠に欠き判断が難しい。また、出土古墳については、旧西和佐村又は岡崎村には多くの古墳が存在し特定することは困難であるが、埋葬施設に横穴式石室をもつ上位から中位階層の古墳から出土したものと想定される。

3. 玉

岩橋千塚古墳群出土とみられる玉は108点あり、種別は勾玉、管玉、棗玉、空玉、丸玉、算盤玉、平玉、小玉がある。玉の素材及び色調については肉眼観察による。法量の計測位置は図12、法量は表２・３に示す。

勾　玉　勾玉は２点ある。勾玉１は、やや半透明の濃青緑色を呈す青瑪瑙（メノウ）製あるいはガラス製で、最大長2.5cm、最大幅1.4cm、厚さ1.05cmを測る小型品である。湾曲部の内側（腹）の凹みが浅く、頭が尾に比べて大きい。表面には粗い研磨により複数の面が形成されている。孔は片面穿孔である。勾玉２は、濃緑黄色を呈し、部分的に濃青緑色を含む碧玉製で、最大長3.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.9cmを測る。湾曲が大きく、頭と尾がほぼ同大でC字形に近い形状を呈する。研磨はやや粗い。片面穿孔である。

勾玉が収納されている箱には２枚のラベルが収められており、「勾玉　海草郡西輪佐　メノウ」、「古墳時代　勾玉　海草郡西和佐村出土　本学所蔵」と記載されている。また、「3-4･555」（和歌山大学台帳番号＝コンテナ番号・収蔵品番号）、「404･６・２」と記載されているタグシールが２枚併せて収められている。

管　玉　管玉は３点ある。管玉１は濃緑黄色を呈する碧玉製で、長さ3.7cm、最大幅0.95cmを測る。両面穿孔である。管玉２は黒色粒を含む暗灰色を呈する滑石あるいは緑色凝灰岩製で、長さ3.25cm、最大幅0.65mを測る。両面穿孔である。管玉３は赤褐色を呈する瑪瑙製で、長さ1.27cm、最大幅0.97cmを測る。

管玉１・２は２枚のラベルとともに同じ箱に収納されていた。ラベルには、「古墳時代　管玉　海草郡西和佐村岩橋出土　本学所蔵」、「管玉　海草郡西輪佐村　明治39年」と記載されている。また、「404・2・2」と記載されているタグシールも併せて収められている。管玉３は、次に紹介する棗玉等と糸で繋がれ別の木箱に収められていた。

棗　玉　棗玉は５点ある。棗玉１・２は黒褐色を呈する埋木製で、棗玉１は長さ1.35cm、最大幅0.99cm、棗玉２は長さ1.56cm、最大幅1cmを測る。上下端に面を持ち、胴部中央で最大径となる。棗玉３～５は暗赤色を呈する琥珀（コハク）製で、棗玉３は長さ1.82cm、最大幅1.33cm、棗玉４は長さ2.06cm、最大幅1.62cm、棗玉５は破片で残存長1.02cm、残存幅1.21cmを測る。埋木製に比べ琥珀製の棗玉は胴部中央での膨らみが弱く、円筒形に近い形状を呈する。

空　玉　銀製空玉が３点ある。空玉１～３は、高さ0.78～0.92cm、最大幅0.78～0.92cmを測る。空玉１の破損部及び空玉２・３の胴部最大径部に見られる継ぎ目から、半球状の玉を２つ合わせて球状にして製作されていたことが分かる。

丸　玉　半透明の水晶製丸玉が４点ある。法量は、高さ0.63～0.69cm、最大幅0.87～0.88cmで、ほぼ同形同大である。

算盤玉　水晶製算盤玉が２点ある。算盤玉１は高さ0.77cm、最大幅0.89cmで、色調は半透明である。算盤玉２は、高さ0.56cm、最大幅0.78cmを測る。色調は透明である。算盤玉１に比べて小型で、胴部中央で稜線が鋭角に作り出されている。

平　玉　透明の水晶製平玉が１点ある。高さ0.83cm、最大幅1.09cmを測る。円盤状を呈し、円周上の側面から片面穿孔されている。

小　玉　ガラス製小玉が87点（小玉１～87）、琥珀製小玉が１点（小玉88）ある。

ガラス製小玉は現在、糸に繋がれ一連になっている。以下、色調別に報告を行う。不透明な淡緑色を呈する個体は10点（小玉１～５、10、11、16～18）あり、高さ0.35～0.52cm、最大幅0.47～0.64cmを測る。上下が切断されたように面が形成されていることから、ガラスを引き伸ばした後に玉を分割する引き延ばし技法で製作された可能性がある。半透明な青色を呈する個体は３点（小玉６・７・9）で、高さ0.32～0.53cm、最大幅0.49～0.61cmを測る。上下端面は丸みを帯びている。不透明な緑色を呈する個体は１点（小玉８）で、高さ0.3cm、最大幅0.59cmを測る。高さに対して幅が広い扁平な形状である。透明な青色を呈する個体は55点（小玉19～53、86）あり、高さ0.12～0.39cm、最大幅0.3～0.53cmを測る。小型で上下端面は丸みを帯び、形状に個体ごとのばらつきがみられる。半分に割れた破片（小玉87）から、球状の気泡が上下方向に連なっている状況が観察できることから、引き伸ばしによる製作であったと推察できる。半透明な濃紺色を呈する個体は５点（小玉12～15、87）あり、小玉12～15は高さ0.44～0.53cm、最大幅0.66～0.75cmを測る。小玉87は破片資料であるが、高さ0.73cm、残存幅0.7cmで、やや大きい。いずれも法量から丸玉としても良い資料である。不透明な黄色を呈する個体は６点（小玉55～60）あり、高さ0.14～0.24cm、最大幅0.2～0.3cmを測る。小型で、上下端に平坦面をもつ。透明な緑色を呈する個体は25点（小玉61～85）ある。高さ0.16～0.39cm、最大幅0.25～0.59cmを測る。小型で、上下端が丸みを帯びている。

なお、ガラス製小玉については、破片資料で内部の気泡等が観察できたものの、小玉１～85は一連で収納箱に固定された状態であったため、製作技法等については不明な点も多い。

このほか、琥珀製小玉（小玉88）は、高さ0.64cm、最大幅1cmを測る。色調は棗玉３～５と同様で、不透明な暗赤色を呈す。半分に割れており、上下端は丸みを帯びる。

管玉３及び棗玉１～５、空玉１～３、丸玉１～４、算盤玉１・2、平玉、小玉１～88は、同じ木箱に収納されており、中には、「404・1」、「404・2・□」、「404・4」、「404・5・1」、「405・3」と記載された５枚のタグシールが収められている。また、木箱の裏には、「明治三十九年五月三日　岡□村大字小手穂山峯筋土手形塚□□採集」と記載された短冊状の紙が貼られている。

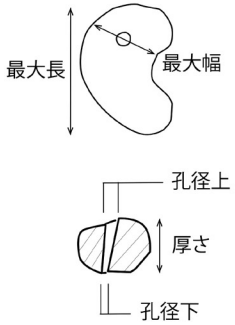


図12　勾玉計測位置模式図

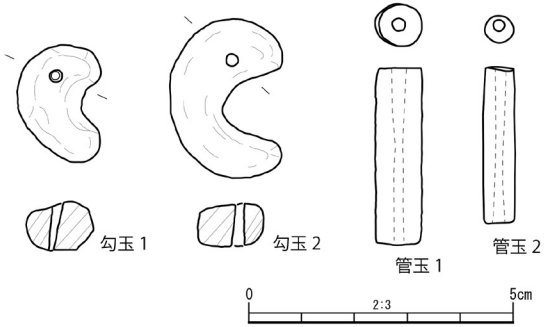


図13　和歌山大学所蔵
伝岩橋千塚古墳群出土勾玉・管玉（S=2/3）

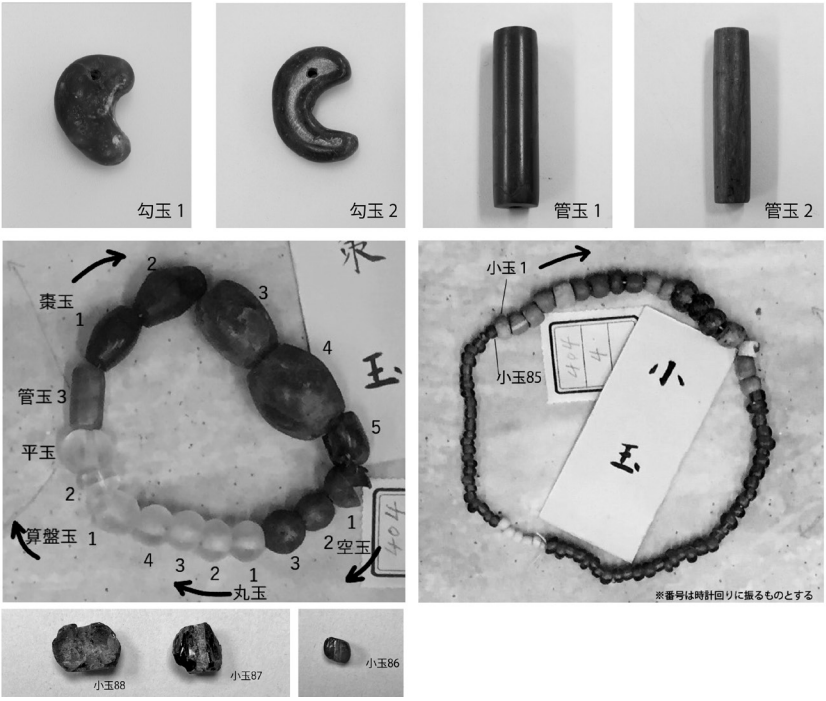


写真3　和歌山大学所蔵　伝岩橋千塚古墳群出土玉写真（縮尺不同）

表2　和歌山大学所蔵　伝岩橋千塚古墳群出土玉一覧①

番号	種別	法量（cm）					残存率	色調	備考
		最大長	最大幅	厚さ	孔径上	孔径下			
勾玉１	青瑪瑙製（ガラス製）勾玉	2.5	1.4	1.05	0.2	0.15	100%	やや半透明の濃青緑色	重量6.5g、研磨粗い
勾玉２	碧玉製勾玉	3.4	1.5	0.9	0.25	0.3	100%	濃緑黄色、濃青緑色を部分的に含む	重量10.73g、研磨やや粗い
管玉１	碧玉製管玉	3.7	0.95	—	0.25	0.2	100%	濃緑黄色	重量6.1g
管玉２	滑石製（緑白凝灰岩製）管玉	3.25	0.65	—	0.25	0.25	100%	暗灰色、黒色粒を含む	重量2.68g
管玉３	瑪瑙製管玉	1.27	0.97	—	0.4	0.4	100%	赤褐色	
棗玉１	埋木製棗玉	1.35	0.99	—	0.21	0.3	100%	黒褐色	
棗玉２	埋木製棗玉	1.56	1	—	0.28	0.21	100%	黒褐色	
棗玉３	琥珀製棗玉	1.82	1.33	—	0.2	0.2	100%	暗赤色	
棗玉４	琥珀製棗玉	2.06	1.62	—	0.2	0.2	100%	暗赤色	
棗玉５	琥珀製棗玉	1.02	1.21	—	0.2	0.2	30%	暗赤色	
空玉１	銀製空玉	0.91	0.92	0.09	0.1	0.15	80%	暗灰色	割れている
空玉２	銀製空玉	0.78	0.78	0.09	0.14	0.15	100%	暗灰色	
空玉３	銀製空玉	0.91	0.92	0.09	0.1	0.13	100%	暗灰色	
丸玉１	水晶製丸玉	0.63	0.87	—	0.4	0.2	100%	半透明	
丸玉２	水晶製丸玉	0.62	0.87	—	0.3	0.4	100%	半透明	
丸玉３	水晶製丸玉	0.69	0.87	—	0.4	0.3	100%	半透明	
丸玉４	水晶製丸玉	0.63	0.88	—	0.3	0.3	100%	半透明	
算盤玉１	水晶製算盤玉	0.77	0.89	—	0.3	0.28	100%	半透明	
算盤玉２	水晶製算盤玉	0.56	0.78	—	0.28	0.22	100%	透明	算盤玉１に比べて小型、体部の稜線が鋭角に作り出される
平玉	水晶製平玉	0.83	1.09	—	0.37	0.2	100%	透明	形状は円盤状を呈する
小玉１	ガラス小玉	0.35	0.62	—	0.16	0.15	100%	不透明な淡緑色	劣化激しい
小玉２	ガラス小玉	0.48	0.5	—	0.22	0.99	100%	不透明な淡緑色	
小玉３	ガラス小玉	0.41	0.56	—	0.23	0.2	100%	不透明な淡緑色	
小玉４	ガラス小玉	0.41	0.57	—	0.2	0.2	100%	不透明な淡緑色	
小玉５	ガラス小玉	0.52	0.64	—	0.19	0.2	100%	不透明な淡緑色	劣化激しい
小玉６	ガラス小玉	0.32	0.55	—	0.18	0.17	100%	半透明な青色	気泡の粒が見える
小玉７	ガラス小玉	0.53	0.61	—	0.18	0.16	100%	半透明な青色	
小玉８	ガラス小玉	0.3	0.59	—	0.22	0.22	100%	不透明な緑色	上下面が丸みを帯びる
小玉９	ガラス小玉	0.44	0.49	—	0.17	0.18	100%	半透明な青色	
小玉10	ガラス小玉	0.42	0.5	—	0.17	0.16	100%	不透明な淡緑色	
小玉11	ガラス小玉	0.35	0.48	—	0.11	0.11	100%	不透明な淡緑色	
小玉12	ガラス小玉	0.52	0.75	—	0.15	0.15	100%	半透明な濃紺色	大きさから丸玉としても良い
小玉13	ガラス小玉	0.44	0.71	—	0.13	0.15	100%	半透明な濃紺色	大きさから丸玉としても良い
小玉14	ガラス小玉	0.45	0.74	—	0.17	0.2	100%	半透明な濃紺色	大きさから丸玉としても良い
小玉15	ガラス小玉	0.53	0.66	—	0.16	0.17	100%	半透明な濃紺色	劣化激しい
小玉16	ガラス小玉	0.44	0.51	—	0.14	0.16	100%	不透明な淡緑色	劣化激しい、上下面が平坦面をもったまま
小玉17	ガラス小玉	0.49	0.47	—	0.13	0.14	100%	不透明な淡緑色	
小玉18	ガラス小玉	0.41	0.49	—	0.12	0.12	100%	不透明な淡緑色	
小玉19	ガラス小玉	0.31	0.38	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉20	ガラス小玉	0.23	0.49	—	0.15	0.15	100%	透明な青色	
小玉21	ガラス小玉	0.14	0.39	—	0.12	0.1	100%	透明な青色	
小玉22	ガラス小玉	0.28	0.34	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉23	ガラス小玉	0.39	0.41	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉24	ガラス小玉	0.3	0.53	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉25	ガラス小玉	0.15	0.35	—	0.14	0.14	100%	透明な青色	
小玉26	ガラス小玉	0.28	0.46	—	0.15	0.15	100%	透明な青色	
小玉27	ガラス小玉	0.31	0.39	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉28	ガラス小玉	0.23	0.36	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉29	ガラス小玉	0.26	0.34	—	0.09	0.09	100%	透明な青色	
小玉30	ガラス小玉	0.27	0.38	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉31	ガラス小玉	0.28	0.42	—	0.15	0.15	100%	透明な青色	
小玉32	ガラス小玉	0.3	0.48	—	0.14	0.16	100%	透明な青色	
小玉33	ガラス小玉	0.16	0.33	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉34	ガラス小玉	0.12	0.37	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉35	ガラス小玉	0.15	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉36	ガラス小玉	0.25	0.42	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉37	ガラス小玉	0.29	0.44	—	0.16	0.16	100%	透明な青色	
小玉38	ガラス小玉	0.24	0.5	—	0.12	0.12	100%	透明な青色	
小玉39	ガラス小玉	0.21	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉40	ガラス小玉	0.22	0.52	—	0.15	0.15	100%	透明な青色	
小玉41	ガラス小玉	0.21	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉42	ガラス小玉	0.24	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉43	ガラス小玉	0.23	0.37	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉44	ガラス小玉	0.31	0.39	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉45	ガラス小玉	0.23	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉46	ガラス小玉	0.23	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉47	ガラス小玉	0.28	0.38	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	

表3　和歌山大学所蔵　伝岩橋千塚古墳群出土玉一覧②

番号	種別	法量（cm）					残存率	色調	備考
		最大長	最大幅	厚さ	孔径上	孔径下			
小玉48	ガラス小玉	0.2	0.33	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉49	ガラス小玉	0.17	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉50	ガラス小玉	0.16	0.4	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉51	ガラス小玉	0.25	0.4	—	0.1	0.1	100%	透明な青色	
小玉52	ガラス小玉	0.25	0.4	—	0.13	0.13	100%	透明な青色	
小玉53	ガラス小玉	0.21	0.45	—	0.15	0.15	100%	透明な青色	
小玉54	ガラス小玉	0.28	0.5	—	0.11	0.11	100%	透明な青色	
小玉55	ガラス小玉	0.14	0.2	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉56	ガラス小玉	0.2	0.28	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉57	ガラス小玉	0.2	0.28	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉58	ガラス小玉	0.2	0.26	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉59	ガラス小玉	0.24	0.27	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉60	ガラス小玉	0.24	0.3	—	0.07	0.07	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉61	ガラス小玉	0.2	0.27	—	0.06	0.06	100%	不透明な黄色	上下面が平坦
小玉62	ガラス小玉	0.2	0.27	—	0.06	0.06	100%	透明な緑色	
小玉63	ガラス小玉	0.19	0.28	—	0.06	0.06	100%	透明な緑色	
小玉64	ガラス小玉	0.27	0.35	—	0.06	0.06	100%	透明な緑色	
小玉65	ガラス小玉	0.26	0.31	—	0.11	0.89	100%	透明な緑色	
小玉66	ガラス小玉	0.18	0.25	—	0.09	0.09	100%	透明な緑色	
小玉67	ガラス小玉	0.24	0.33	—	0.09	0.09	100%	透明な緑色	
小玉68	ガラス小玉	0.32	0.31	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉69	ガラス小玉	0.35	0.33	—	0.09	0.09	100%	透明な緑色	
小玉70	ガラス小玉	0.32	0.3	—	0.12	0.12	100%	透明な緑色	
小玉71	ガラス小玉	0.19	0.35	—	0.14	0.14	100%	透明な緑色	
小玉72	ガラス小玉	0.27	0.28	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉73	ガラス小玉	0.22	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉74	ガラス小玉	0.29	0.25	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉75	ガラス小玉	0.27	0.27	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉76	ガラス小玉	0.29	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉77	ガラス小玉	0.18	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉78	ガラス小玉	0.18	0.34	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉79	ガラス小玉	0.16	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉80	ガラス小玉	0.24	0.3	—	0.08	0.08	100%	透明な緑色	
小玉81	ガラス小玉	0.27	0.37	—	0.12	0.12	100%	透明な緑色	
小玉82	ガラス小玉	0.23	0.3	—	0.12	0.12	100%	透明な緑色	
小玉83	ガラス小玉	0.24	0.35	—	0.1	0.1	100%	透明な緑色	
小玉84	ガラス小玉	0.18	0.3	—	0.1	0.1	100%	透明な緑色	
小玉85	ガラス小玉	0.24	0.3	—	0.11	0.11	100%	透明な緑色	
小玉86	ガラス小玉	0.33	0.4	—	0.17	(0.15)	50%	透明な青色	球状の気泡が連なる
小玉87	ガラス小玉	0.73	(0.7)	—	0.23	0.27	40%	半透明な濃紺色	小玉12～15と同形状、大きさから丸玉としても良い
小玉88	琥珀製小玉	0.64	1	—	0.24	(0.35)	40%	不透明な暗赤色	上下面は丸みを帯びる

位置づけ　和歌山大学が所蔵する上記玉は、耳環と同様に出土した古墳等について明らかでないため位置づけが難しいが、ここでは岩橋千塚古墳群から出土した玉の傾向から検討を行う。

岩橋千塚古墳群での玉の副葬は、5世紀初頭から6世紀後半のTK43型式期までの古墳において墳丘の規模及び墳形、埋葬施設の種別を問わず認められている（瀬谷2016）。中期段階では碧玉製・滑石製・ガラス製玉が中心で、MT15～TK10型式期以降に金属製玉の増加が認められる。一方、水晶や瑪瑙製の玉は、和歌山県内ではすさみ町の上ミ山古墳でMT15型式期に水晶製切子玉・丸玉、琥珀製棗玉・丸玉、埋木製棗玉、ガラス製小玉等が出土しているものの、岩橋千塚古墳群ではMT85型式期の天王塚古墳で瑪瑙製及び琥珀製玉が確認されたほか、TK43型式期の将軍塚古墳で水晶製平玉、前山A13

号墳で水晶製切子玉、山東22号墳で水晶製切子玉・算盤玉、琥珀製管玉、埋木製棗玉、ガラス製丸玉等が出土するなど6世紀後半以降に増加する傾向がみられる。また、勾玉は5世紀から6世紀後半まで出土しているが、発掘調査において出土した事例が少ないため時期毎の傾向が認めづらい。碧玉製の管玉については5世紀初頭から6世紀後半まで出土し、当初は両面穿孔であったものが6世紀前半以降片面穿孔となる傾向がみられる。

また、玉の種類と被葬者の階層的位置づけについては、首長墓である大日山35号墳や天王塚古墳では、王権との関わりが指摘される銀製空玉や瑪瑙製切子玉等の出土が認められることや種類の多様性が認められる。

このことから、和歌山大学所蔵の玉は碧玉製及び緑色凝灰岩製管玉については古墳時代中期、水晶・瑪瑙・埋木製玉については6世紀後半に多く認められる種類と位置づけることができる。一方で、和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土玉は、保管されていた箱に収められたラベルや後述する和歌山大学収蔵目録から海草郡岡崎村古墳出土品と西和佐村岩橋古墳出土品があり、さらに各グループが同一の古墳からの出土品であるか等については確認することができないため、玉の組成について言及することは難しい。

4. 陶質土器

岩橋千塚古墳群出土とみられる陶質土器は、有蓋高坏である。この陶質土器は、すでに冨加見泰彦氏により報告されていることから（冨加見2005a・b）、ここでは冨加見氏の報告を引用しつつ、概要を記載することにする。

陶質土器　有蓋高坏　蓋（図14-1・写真4-1）　口径約131cm、器高78cm、つまみ径4.7cm、つまみ高2.8cmである。つまみには長方形スカシ孔が4方向から穿たれ、蓋の天井部には2段の列点文とそれを囲むように3条1単位の圏線が巡る。天井部と口縁部の境には明瞭な稜があり、ヘラ記号が線刻されている。内面には自然釉が付着している。胎土には僅かに白色砂粒を含み、焼成は堅緻で色調は灰色を呈する。

陶質土器　有蓋高坏　高坏（図14-2・写真4-2）　口径約12.7cm、器高10.2cmである。坏部には、蓋と同様に直線的なヘラ記号が線刻されている。脚部には四方に長方形のスカシが穿たれている。胎土には白色砂粒を含み、焼成は

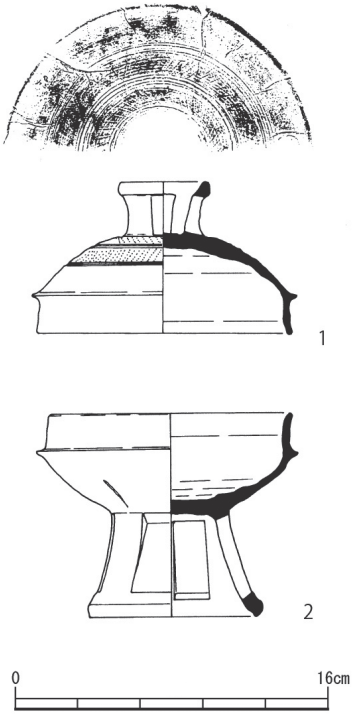


図14　伝岩橋千塚古墳群
出土陶質土器(S=2/3)

写真4　伝岩橋千塚古墳群
出土陶質土器写真(縮尺不同)

良好で色調は灰色を呈する。

以上の土器は、同形状の土器が慶州味鄒王稜地区皇南洞110号墳で出土していることから(大韓民国文化広報部文化財管理局 1976)、5 世紀の新羅土器と考えられている。

5. 紹介した遺物の来歴

前回紹介した須恵器と埴輪及び今回紹介した玉と耳環については、現在、和歌山大学に保管されているものである。また、今回紹介した陶質土器と鏡については、和歌山大学教育学部歴史学研究室から和歌山県立紀伊風土記の

丘に寄託されているものである。

昭和９年(1934)に印刷された和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室の収蔵目録(以下、収蔵目録という。)には、岩橋千塚古墳群から発見されたと思われる遺物が掲載されている。収蔵目録には、蒐集地「海草郡西和佐村岩橋古墳」の遺物として「(記號・番號)402・4　平瓶　一点」、「402・5　蓋杯　二点」、「404・3　平玉　一点」、「404・4　小玉　一連」、「404・6・2　勾玉　二点」、「405・1　金環　三点」、「405・2　金環　一点」が掲載されている。また、蒐集地「海草郡岡崎村古墳」の遺物として「404・1　棗玉　五点」、「404・2・1　管玉　一点」、「404・2・2　管玉　三点」、「404・5・1　丸玉　九点」、「404・5・2　丸玉　四点」、「405・3　金環　一点」、「406・1　甲冑破片　若干」、「406・2・1　鐵(鉄)鏃　若干」、「406・2・2　鐵鏃　一点」、「406・3　馬具破片　若干」、「406・4　直刀破片　一点」が掲載されている。いずれも蒐集者については記されていない。「海草郡岡崎村古墳」の遺物は蒐集年が「明治三九年」(1906)となっている。西和佐村岩橋古墳と岡崎村古墳については、どの古墳か特定できない。

和歌山縣女子師範學校は、明治24年(1891)に和歌山県尋常師範学校の女子部として設置され、昭和４年(1929)に分離独立して現在の海南市日方に開校された。同時に和歌山県立日方高等女学校も併設された。和歌山縣女子師範學校は、和歌山県師範学校などと統合されて、昭和24年(1949)に和歌山大学が発足した。

和歌山大学収蔵品には、「岡崎村大字小手穂山峯筋土手形塚ニテ採集　明治三九年」と貼紙されたものがあり、遺物の内容もほぼ一致することから目録の「海草郡岡崎村古墳」とされている収蔵品と判断できる。したがって、和歌山縣女子師範學校に収蔵されていた遺物は、和歌山大学に引き継がれたことがわかる。ただし、蒐集年が明治39年となっているものは、女子師範学校の前身である和歌山県尋常師範学校(女子部)の時期に収蔵したと思われる。

前号で紹介した須恵器については、収蔵目録に「平瓶　一点」、「蓋杯　二点」があり、はそうを「平瓶」に比定することは無理があるかもしれないが、和歌山大学収蔵品に平瓶がないことから、須恵器３点はこれらに該当する可能性がある。また、前号で紹介した埴輪について、収蔵目録には、埴輪は「日

高郡東内原村辨天山古墳」の１点しか掲載されておらず、岩橋千塚古墳群出土品は記されていない。円筒埴輪には「海草郡鳴神村字藤谷ヨリ発見」と書かれた貼紙があり、古い時期に貼られたと考えられるものの、どの時期に和歌山大学に収蔵されたか判明しないが、昭和９年発行の目録にないことからそれ以降の収蔵品と推察される。

鏡については、収蔵目録に「403・1　鏡　一点」、「403・2　鏡　一点」、「403・3　鏡　一点」、「403・4　徳川時代のもの　一点」の４点が記されているが、これ以上の情報がなく、鏡を特定することは困難である。紀伊風土記の丘に寄贈されている郷土史家の故羯磨正信氏の資料に今回紹介した鏡に関する資料が確認できた。資料中の記事（校内新聞、羯磨氏の発表記事、手書きの日付25.12.20＝昭和25年か）には、「過日和大學藝學部の資料室にて偶然私（羯磨）は見出したもので、これは蟠虵文仿製鏡（日本製鏡）で、有名な紀伊國岩橋千塚出土のものであります。」とある[6)]。なお、国立歴史民俗博物館の鏡集成（国立歴史民俗博物館 1994）によると、和歌山大学が所蔵者になっている鏡は３点集成されており、うち１点が伝岩橋千塚古墳群内出土の虺龍文鏡（完形8.6cm）で、今回紹介した鏡で間違いない[7)]。この集成でも出土年は「不明」となっている。また、和歌山大学の収蔵コンテナ2-8の中に、鏡用の箱が２つあり、それぞれ「漢式鏡　四獣四乳鏡　海草郡西和佐村岩橋古墳出土　当学所蔵」、「四獣四乳鏡　海草郡西和佐村岩橋発掘品（鉛筆で（倣製鏡）蟠虵文と追記）」と書かれた紙ラベルが入っており、現物は入っていない。うち１つは今回紹介した鏡のものと推測できる。もう１つは、同じ鏡の箱が２つ用意されていたのか、または、もともと鏡がもう１面あったのか、不明である[8)]。

陶質土器については、収蔵目録では確認できず、現在のところどの時期に和歌山大学が収蔵したか不明である[9)]。関西大学が昭和40年代に楠見遺跡を調査した際に県内の陶質土器を検討しており、この陶質土器が「伝岩橋千塚出土土器」として実測されている（関西大学 1972）。「和歌山大学保管」と記述されており、昭和40年代以前には和歌山大学が保管していて研究者には知られていたことがわかる[10)]。また、紀伊風土記の丘開館時（昭和46年）の展示品を撮影したと思われる遺物写真にもこの陶質土器が写っており、開館当初から紀伊風土記の丘へ寄託されていたことが窺える（陶質土器の預証書は昭和

49年から確認できる)[11]。いずれの資料にも岩橋千塚古墳群から出土したことがわかるだけで、どの古墳のものかは判明していない。

耳環と玉については、収蔵品に添えられたラベル等に「404～406」の番号があり、収蔵目録の記載と一致する(収蔵目録では404が玉、405が耳飾、406が其他遺物となっている)。また、棗玉や平玉、勾玉など個数が一致するものも多い。このことから、棗玉５点(収蔵目録は５点)、管玉３点(収蔵目録は４点)、は収蔵目録の「海草郡岡崎村古墳」のもので、平玉１点(収蔵目録は１点)、勾玉２点(収蔵目録は２点)は「西和佐村岩橋古墳」のものであると考えられる。丸玉は収蔵目録では９点・４点が「岡崎村古墳」で、空玉・水晶製丸玉・水晶製算盤玉の合計が９点であることから、これらは岡崎村古墳のものと推測できる。また、一連となっている小玉の中に少し大型の濃青色の小玉が４点あり、これが岡崎村古墳の可能性がある。収蔵目録では小玉一連が「岩橋古墳」となっており、小玉の大半が岩橋古墳のものと考えられる。耳環については、収蔵目録では４点が「海草郡西和佐村岩橋」で、１点が「岡崎村・明治三九年」となっている。図7-3には「405・3」のタグシールがあり、収蔵目録と一致するのでこれが岡崎村となり、図7-1・2には「古墳時代金環(大)・銀環(小)　当時の装身具　海草郡西和佐村出土　当学所蔵」のラベルと「405・1」のタグシールがあり、収蔵目録の岩橋古墳のものと推測できる(この場合、収蔵目録の４点中２点が不明ということになる)。

このように多くの収蔵品が収蔵目録の記載と一致することから、明治時代の和歌山大学の前身である師範學校の時代に収蔵され、今日まで受け継がれてきたものといえる。「岩橋古墳」や「岡崎村古墳」がどの古墳であるかについては今後、調査・検討をしていかなければならない[12]。

6. まとめ

以上、和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土の銅鏡及び耳環、玉、陶質土器について、資料の特徴と時期及び来歴についての検討を行った。耳環及び玉については、岩橋千塚古墳群全体での出土傾向から、出土古墳の特定には至らないものの出土時期や被葬者像について可能性を示すことができた。一方で、銅鏡については古墳出土品でない可能性も含めて理化学的分析が必

要であることを指摘した。また、これらの資料の多くが、和歌山大学の前身である師範学校時代に収蔵されたものであることが来歴より明らかとなった。

なお、玉が収納されていた木箱と同様に裏面に「岡崎村大字小手穂山峯筋土手形塚ニテ採集明治三九年」のラベルが貼られた別の木箱に鉄製品が収納されていることから、今回報告した資料の多くが出土したとされる「岡崎村古墳」については、今後、鉄製品の報告・検討と併せて出土古墳の検討を行うものとする。

（はじめに・6. まとめ：瀬谷、1. 岩本、2. 基本報告：馬場、分析・考察：金澤、3. 瀬谷・石丸、4. 金澤、5. 仲原が執筆し、遺物の実測は石丸・中西・仲原が担当し、トレースは馬場が担当した。全体の体裁は全員の意見を基に金澤が編集した。）

1) 和歌山大学紀州経済史文化史研究所所蔵（以下、「和歌山大学所蔵」という。）の伝岩橋千塚古墳群出土品の全体像を把握するため、個別研究等で報告されている資料についても、資料紹介の対象としている。

2) 瀬谷今日子・仲原知之・石丸彩・冨永里菜 2020「和歌山大学所蔵の伝岩橋千塚古墳群出土品について(1)―須恵器及び埴輪―」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第41号　和歌山大学紀州経済史文化史研究所

3) タグシールの番号と昭和９年(1934)に刊行された和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室の収蔵品目録によると、金環５点のうち４点は海草郡西和佐村岩橋古墳出土、残り１点は岡崎村出土とされている（和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室1934）。しかし、これら遺物が引き継がれたはずの和歌山大学では、現在確認できる金環は５点あり、うち２点は海草郡西和佐村岩橋古墳出土、１点は海草郡岡崎村出土、残り２点は伝有田郡出土となっており異なっている。

4) 銀環の素材については、色調から表面材を銀と判断したが、錫など他の素材の可能性もある。今後理化学的な分析を行う必要がある。

5) 出土数については、総数900基にものぼる日本最大規模の古墳群としては一見少なくみえるが、早くに国史跡・特別史跡となり埋葬施設の発掘調査事例が少ないこと、また岩橋千塚古墳群が広く知られるようになった明治時代頃から盗掘が行われたことに

よる、副葬品の遺存状況の悪さが背景にあるものと思われる。

6）資料の中には写真や拓本（拓本のメモ書きには「四獣四乳鏡　師範学校蔵　岩橋古墳出土」とある）のほか、京都大学の梅原末治氏にこの鏡の拓本・写真を送った際に、梅原氏から返送された手紙も残されており、鏡の所見（「拓本からすると舶載鏡であって、而もそれは中国の学者の申す四花鑑（犬の一種の虵文ですが）であり、時代は少くも漢の中期以前に遡るもの、本邦では先頃、岡山縣から一面出土、これ以外ではあなたの縣の椒濱出土品が知られてゐるのみに過ぎません。そう云ふ鏡が岩橋千塚の一つから出たとすると面白い次第です。拓影からすると鋳上りもよいようですね。」）が書かれている（手紙の消印は昭和28年）。なお、昭和30年発行の『紀伊考古図録』（和歌山県教育委員会1955）で古墳時代の鏡の項目を羯磨氏が執筆しているが、虺龍文鏡について漢代中期以前に遡る漢式鏡で、椒古墳と岡山県のみで出土していると梅原氏の所見どおり記述しているが、岩橋千塚古墳群出土の記載がない。羯磨氏資料の拓本や写真、手紙中の鋳上りもよいという表現などから、今回紹介した鏡以外に同形式の鏡が存在する可能性も考えられる。

7）他の２点は、伝岩橋千塚古墳群内出土の鏡式名不明（完形9.5cm）、岩橋千塚古墳群内出土の内行花文鏡（約7.4cm、現物なし）となっている。和歌山大学の収蔵庫を捜索した結果、コンテナ番号6-8の中に「鏡（高麗朝）」の紙ラベルとともに銅鏡が１面あり（直径約9cm）（写真５）、鏡式不明鏡がこれに該当する可能性がある。内行花文鏡は確認できなかった。

8）和歌山大学の収蔵台帳にはコンテナ番号2-8に「番号62 0：銅／銅鏡／地歴準備室ロッカー／完形」、「番号62 1：銅／銅鏡／地歴準備室ロッカー／完形」とあり、鏡が２面あった可能性をうかがわせる。なお、鏡用の箱の裏には２つとも「一　甲　（氏名）」と鉛筆で書かれている（それぞれ別人物）。一　甲とは師範學校の一年甲組と考えられ（和歌山大学紀州経済史文化史研究所吉村氏の御教示による）、鏡がその生徒により発見されたか、あるいは、師範學校で使用していた箱をたまたま鏡用に転用したか、検討が必要である。岡崎 1977の集成でも和歌山大学教育学部歴史準備室所蔵として、岩橋千塚発見の鏡が３面集成されている。１つは四虵四乳鏡（径8.65cm）で今回紹介した鏡と考えられる。もう２面は、鏡式名記載なし（径7.4cm）と内行花文鏡（径11.6cm）である。国立歴史民俗博物館 1994の集成では、内行花文鏡は径（7.4cm）で、現物なしとなっているので、径11.6cmが正しいと推測できる。鏡式名記載なしの鏡は、1994年

の時点で存在していなかったので、和歌山大学に所蔵されている径約9.0cmの鏡をこれにあてた可能性がある(写真５)。そうすると、岡崎 1977の集成時点では径7.4cmの鏡が存在しており、その後、内行花文鏡とともに所在が確認できなくなっていると推察することができる。なお、羯磨氏の資料にある鏡の拓本は、径7.4cmであり(図15)、メモ書きに「岩橋古墳出土　四乳四獣鏡(師範學校蔵)」とある。また、鏡の写真(写真６)の裏には「蟠地紋鏡　和大学藝部資料室　岩橋千塚　発掘」と書かれている。

9) 前号でも紹介したが、昭和30年発行の『紀伊考古図録』(和歌山県教育委員会1955)には和歌山大学所蔵の円筒埴輪や形象埴輪が掲載されているが、今回紹介した陶質土器は掲載されていないことから、昭和30年代以降に収蔵された可能性がある。

10) 関西大学 1972の注では、「伝岩橋千塚出土のものについては、和歌山県教育委員会小賀直樹氏の御配慮があった。また、伝岩橋千塚出土遺物の実測図は、関西大学卒業生菅谷文則、櫃本誠一氏によるものである。」とされている。

11) その後、冨加見泰彦氏により岩橋千塚古墳群の陶質土器を紹介する中でも実測図・写真が取り上げられているが、所蔵や来歴等の記載はない(冨加見 2005a、2005b)。

12) 収蔵品の木箱に「岡崎村大字小手穂山峯筋土手形塚」とあり、岡崎村古墳については１つ

写真5　和歌山大学所蔵銅鏡①

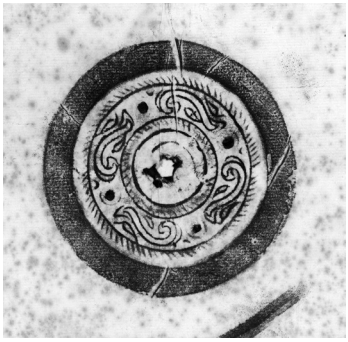


図15　和歌山大学所蔵銅鏡拓本

写真6　和歌山大学所蔵銅鏡②

の古墳からまとまって発見された遺物である可能性が高い。

【引用・参考文献】

梅原末治 1937「古鏡の化学成分に関する考古学的考察」『東方学報』京都第８冊　東方文化学院京都研究所

岡崎敬 1977『日本における古鏡発見地名表　近畿地方Ⅰ』

岡村秀典 1984「前漢鏡の編年と様式」『史林』第67巻第５号 史学研究会

(財)和歌山県文化財センター 1992『山東22号墳―県道和歌山橋本線改良工事に伴う発掘調査概報―』

関西大学 1972「和歌山における陶質土器」『和歌山市における古墳文化』関西大学文学部考古学研究室紀要第４冊

孔祥星・劉一曼 1984『中国古代銅鏡』文物出版社(高倉洋彰・田崎博之・渡辺芳郎〔訳〕1991『図説中国古代銅鏡史』海鳥社)

国立歴史民俗博物館 1994『国立歴史民俗博物館研究報告(共同研究「日本出土鏡データ集成」2　弥生・古墳時代遺跡出土鏡データ集成)』第56集

大韓民国文化広報部文化財管理局 1976『慶州地区古墳発掘調査報告書第１輯』

末永雅雄編 1967『岩橋千塚』和歌山市教育委員会

瀬谷今日子 2016「岩橋千塚古墳群における副葬品の様相」『岩橋千塚とその時代―紀ノ川流域の古墳文化―』和歌山県立紀伊風土記の丘

辻田淳一郎 2018『同型鏡と倭の五王の時代』同成社

仲原知之 2014「前山B36号墳の検討―ピロティ移築古墳の調査概要と出土遺物―」『紀伊風土記の丘研究紀要』第２号　和歌山県立紀伊風土記の丘

仲原知之 2016「岩橋千塚古墳群の発掘調査・史跡指定の歩み」『紀伊風土記の丘研究紀要』第４号　和歌山県立紀伊風土記の丘

冨加見泰彦 2005a「報告２、伝岩橋千塚出土の半島系土器について」『紀伊風土記の丘年報』第31号　和歌山県立紀伊風土記の丘

冨加見泰彦 2005b「伝岩橋千塚出土の半島系土器について」『駒澤考古』30号　駒澤大学考古学研究室

藤森寛志 2013「近代における和歌山県の埋蔵物の記録１」『紀伊風土記の丘研究紀要』創刊号和歌山県立紀伊風土記の丘

梁上椿 1940-42『巌窟蔵鏡』（田中琢・岡村秀典〔訳〕1989『巌窟蔵鏡』 同朋舎）
横田慎吾 2017「熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について」『書陵部紀要　陵墓篇』69 宮内庁書陵部
和歌山縣女子師範學校・和歌山縣立日方高等女學校郷土研究室 1934『収蔵目録』
和歌山県教育委員会 1955『紀伊考古図録』
和歌山県 1921「和歌山縣史蹟調査報告第一（岩橋千塚第一期調査）」『和歌山県文化財調査報告書（一）』1974株式会社歴史図書社所収
和歌山県 1983『和歌山県史』
和歌山県教育委員会 1967『昭和41年度埋蔵文化財緊急発掘調査概報』
和歌山県教育委員会 2004『和歌山県埋蔵文化財調査年報』平成14年度
和歌山県教育委員会 2019『特別史跡岩橋千塚古墳群保存活用計画』
和歌山県立紀伊風土記の丘 1976『紀伊風土記の丘年報』第３号

【図版・写真出典】

図１～３：岩本作製。

図４：1. 和歌山県椒古墳（東京国立博物館蔵・TNM Image Archives）、2. 兵庫県宮山古墳（姫路市教育委員会蔵）、3. 島根県小屋谷３号墳（島根県立八雲立つ風土記の丘蔵）、4. 千葉県姉崎二子山古墳（國學院大学博物館蔵）、5. 伝・愛知県兜山古墳（名古屋市博物館蔵）、6. 伝・鳥取県東郷町宮内（鳥取県立博物館蔵）。

図５：1. 兵庫県宮山古墳（姫路市教育委員会蔵）、2. 島根県小屋谷３号墳（島根県立八雲立つ風土記の丘蔵）、3. 千葉県姉崎二子山古墳（國學院大学博物館蔵）、4. 伝・愛知県兜山古墳（名古屋市博物館蔵）、5. 伝・鳥取県東郷町宮内（鳥取県立博物館蔵）。

図６：金澤作製。

図７：１～3. 仲原実測。馬場デジタルトレース。

図８：１～4. 中西実測。5. 末永編 1967より転載。6・7. 中西実測。8. 仲原実測。9. 中西実測。10～16. 仲原 2014より転載。／実測遺物は馬場デジタルトレース。

図９：17・18. 仲原実測。19から27. 県センター 1992より転載。28. 中西実測。29. 末永編 1967より転載。30. 和歌山県教委 2004より転載。31. 風土記の丘 1976より転載。32. 石丸実測。／実測遺物は馬場デジタルトレース。

図10：33. 仲原実測・デジタルトレース。34～36. 中西実測。馬場デジタルトレース。

図11：金澤作製。

図12：石丸作製。

図13：仲原実測。石丸・馬場デジタルトレース。

図14：冨加見2005aより転載。

図15：羯磨正信氏拓本。

写真１～３・５：金澤撮影。

写真４：和歌山県立紀伊風土記の丘撮影・提供。

写真６：羯磨正信氏撮影。